



JA兵庫みらい
営農経済部 あぐり創生課
TEL 0790-47-1282
FAX 0790-47-1674

2026. 5月号

園芸 【黒大豆のえだまめをつくろう】

大粒で粒揃いの良い黒大豆は、お正月に食べる煮豆はもちろん、えだまめとしてもお馴染みです。最近では、身体に良いとされるイソフラボンやアントシアニンなどの成分を含んでいるため、健康食材としても注目されています。

○畑の準備

出来るだけ何回も耕起（畝立て）して土を細かくしてください。

大豆は根粒菌により空気中の窒素分を吸収します。根粒菌は弱アルカリ性土壌と空気を好むので、種まきの2週間前に土作り資材（例：セルカ100g/m²、堆肥1kg/m²）、1週間前に元肥（例：果菜ゴールデン有機80～100g/m²）を施肥し、畝幅1～1.2mで畝立てを行います。ネキリムシの多い圃場では、ダイアジノン5%粒剤などを使用しましょう。

○種まき

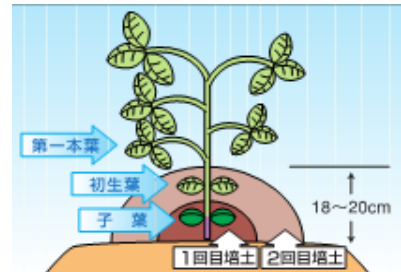
黒大豆の特徴として種まきの時期とは関係なく開花（8月中旬）が始まります。

播種時期については様々な考え方がありますが、台風による倒伏のことを考えると、6月中旬頃が種まきの適期となります。株間30cm程度をあけて1条植えで栽培します。

1か所につき1粒まき、覆土します。覆土は浅いと根が浮き上がり、深いと発芽しても土中で腐ることがあるので覆土は2cm～3cmで十分です。直播きの場合、欠株が出るため、あらかじめ補植苗を畝端等で用意し、補植しましょう。鳥害等が気になる方は、セルトレイで育苗し、移植を行ってください。

○土寄せ（中耕培土）

除草、不定根発生による倒伏防止、空気を入れる事による根粒菌着生のために土寄せを7月上旬～7月25日頃まで2回行います。1回目は土の乾いた早い段階で実施し初生葉の元まで土を寄せます。2回目で第一本葉の根元までしっかりと寄せます。



○開花期以降の管理

開花期にはたくさんの花がつき、肥料分が不足するので、樹に力をつけるために追肥（例：野菜専用化成20～30g/m²）を行います。

灌水については、着果促進と肥大促進のために8月上旬から10月上旬まで、畝間灌水を流し水程度で行います。

○防除

8月下旬（開花終期から莢の伸び始め）～9月中旬（子実の肥大期）にかけて、ハスモンヨトウ・カメムシ類・マメシクイガの防除として、トレボン粉剤を散布してください。

○収穫

10月上旬中旬になれば、えだまめで美味しく食べることができますので楽しみにして栽培してください。



水稲

【5月からの田植え準備から定植まで】

本年も田植えの時期になりました。田植えに向けて機械の点検・調整をおこない、事故のないよう気をつけて安全に作業をおこなってください。

苗の管理 自家育苗の場合は、2葉期の頃に太陽シートをはがしましょう。

【ポイント】太陽シートをめくるのは曇りの日や夕方を選んでください。いきなり強光下にさらした場合や、10℃以下の低温になると白化症状が発生しやすくなります。緑化後は、自然の光・気温などの環境に徐々に慣らしておいてください。

箱施用剤 大変手軽で防除効果が高い薬剤です。使用時は除草剤と間違えないように注意し、苗についた露を払い落としてから散布処理してください。散布処理後、苗についた薬剤を払い落とし、軽く散水して薬剤を育苗土表面に落ち着かせてください。



ルーチンエキスパート箱粒剤

※育苗センター苗を購入される方は、すでに箱施用剤を散布しております。ご注意ください。

使用時期：播種時（覆土前）～田植当日
使用量：1箱あたり50g
いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ニカメイチュウ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、フタオビコヤガ、イネツトムシ



代かき 田植え前の代かきは、水田の漏水防止と田面を均平にするという目的があります。また基肥の土壌混和や雑草抑制も兼ねる重要な作業です。

【ポイント】少なめの水でロータリーの回転を落として丁寧におこなうと、田面の均平度合いや、除草剤の効果が高まります。ただし、あまりかきすぎると土中の空気を追い出し、酸欠状態となって根腐れの原因となるので注意してください。

田植え なるべく風の無い、暖かい晴れた日に、田植えをおこなってください。

【ポイント】植え付け本数（目安）【うるち米：2～3本植、坪60株】【山田錦：2～3本植、坪50株】植え付け本数が多いと、倒伏したり病害虫の発生原因になります。

余り苗 余った苗をほ場に放置すると、「いもち病」の発生原因になりますので、補植作業が終わればすぐに処分してください。

水管理 水田用除草剤を散布後に、落水やかけ流し、畦畔からの漏水で水田の水が流れ出してしまうと、せっかくの薬剤の効果も低下してしまいます。また、水田で使用される農薬は、水系への安全性も確認されていますが、同時期に広範囲で流出してしまうと、水域の動植物に影響を与える可能性があります。これらを防ぐためにも、農薬が土壌などに落ち着くまでの7日間は、水田の水を外に出さない水管理を徹底しましょう。

・夏野菜の定植時期になってきました。5月に入り、気温が上昇してくると初期の病害虫の発生時期になってきます。

生育初期の被害が、後の生育不良につながるので植え付け後に防除を行きましょう。

・多くの夏野菜は植え付け2～3週間後に追肥を行います。雨が降る前に追肥を散布すると、効果が早く効率的です。

問い合わせ先

加西営農生活センター
TEL0790-47-1286

三木営農生活センター
TEL0794-82-6150

小野営農生活センター
TEL0794-63-6905